

聖化

'88. 3. 15

日本聖化交友会機関誌

No. 5

聖化の福音の旗印のもよび

キリスト兄弟団
西宮教会牧師 小平照夫



「聖徒はいよいよ聖なるものとなれなさい」(黙示二二・11) 日本聖化交友会の発足によって、日本におけるきよめの信仰に立つものたちの一致と協力が更に深められていることを感謝しています。このことは、神のご要請であり、聖徒たちの長き年月の念願であり、また時代の必要に応える教会の業であることを痛感せずにはおられません。

数年前、ジョン・ウェスレーに学ぶ会の聖会において、今は天に凱旋された長島幸雄先生が訴えられた聖化の信仰への重荷の言葉を思い出しています。先生は現代の教会に欠けている三つの要素について語られました。それは

- 一、信仰生活の実践に欠けている。
- 二、罪の誘惑に勝つ力に欠けている。
- 三、教会の成長の力が欠けている。

ということでした。

確かにキリストチャンの信仰的知識は増大しました。宣教の業も進められ、教会も成長しつつあります。しかし教会とキリストチャンが果して「召しにふさわしく歩みなさい」(エペソ四・1)と使徒が述べているみことばに現実的に応えているであろうかと考えるのです。また「地の塩」「世の光」としての生ける使命を果たしているだろうかと自問いたします。

現在、日本の教会に欠けているものがあるのです。私たちは、福音に生き、これを実証するためにどうして聖化の信仰の必須性を覚えなくてはなりません。

私は戦後、学生時代に救いを受け、受洗し、C・Sの教師などをしていました。しかし、昭和二十七年四月七日、ある家庭集會に招かれました。数名の小さな集りでしたが、みことばの奨励をいただき、祈りが始まっ

たとき、不思議に魂が聖に神の臨在の前に引き出されているのを覚ええました。キリストがこの卑しい私を愛し、私の罪のために血潮を流されたことを示され、生まれて始めて徹底的な罪の悔改めをしました。それにより神のビジョンは魂の中に鮮明にされ、燃ゆる御霊の愛に押し出されて献身し、伝道者になりました。

今日まで私は年と共に聖化の恵みを慕い求め、この福音の旗印のもとで信仰の戦いを全うしたいと心から願っております。

第3回 聖化大会

- 日時/'88 10/24・25(月/火)
- 講師/(アズベリー神学校教授) デビッド・トンプソン博士
他日本人講師
- 会場/日本キリスト教団 淀橋教会

■聖会第一夜

「ヒビの入った聖徒」

クラレンス・ベンス博士



ダビデ王ついて聖書は非常に興味ある記事を提供している。

(列王記I十五・五)ダビデの生涯はすばらしい証しの生涯であった。彼は主の目にかなうことを行い生涯、主の戒めを守った。ヘテ人ウリヤのこと以外は、これは彼の生涯に於る例外的なできごとであった。

神の聖徒ダビデ、彼の生活にヒビが入っていたのである。

一、なぜダビデが罪に落ちていったか(サムエル記II十一)

①ダビデは神が招いていくたさる仕事に忙しくしていなかった。本来戦いに出て行かなければならない立場であったにもかかわらず、彼は自分の部下達を戦いに出したのである。真面目なクリスチャンが怠惰になつてしまつて他の人達に仕事を任せてやらせているならば、あなた自身怠惰だと言わざるを得ない。神の働きから引き下がる時あなた達の生活にも霊的なヒビが入るのである。

取つてねじ曲げてしまふ。美しきパテシバを手玉にとつてねじ曲げ悪に変えてしまつた。今日においても異性に対する思いを欲情に変え、一生懸命働く動機をむさぼりに変え、指導的立場をねじ曲げ高慢さとしてしまふ。

③誘惑されたからである。

誘惑は罪ではないが罪は誘惑に近い。誘惑がどこで罪に変わったかは分らない。しかし、誘惑を自分の内に成長するようにした故に、ダビデは罪に負けてしまったのである。私達の心の中にある意図にかかつている。聖霊の支配の中を歩んで人が罪に陥ることがあり得る。神とともに歩むことを止めるとき罪に負ける。悪魔はあなたについての弱点、あなたの落とし穴を知つてゐる。ダビデは罪にまつわりつかれて落ちてしまつた。(ヘブル十二・一)

②罪に対する対処

①ダビデは自分の罪を隠そうとした。彼の罪は誰も知らないことである。夫ウリヤを戦場から

招き、妻のもとに帰そうとした。そして自分の罪を隠そうとしたのである。

②悪しき陰謀。

ダビデはウリヤが自分の命令に従わないことを知ると、彼を激戦の正面に出し置き去りにした。姦淫の罪を隠すために殺人の罪を犯したのである。

③言い訳

ダビデは自分自身に対して自分自身の規則をつくる。自分だけは例外だと考える。牧師の中には自分は牧師であるから特別だと言つて罪を葬ろうとする人もゐる。また信徒の中には神の前にあつて特別だと思ふ人もゐる。他の人にとつて罪であるならばそれは王にとつても罪なのである。ダビデは自分自身の罪をおおい隠すことも、それを言い訳を持つて葬りさることも出来なかつた。

④無視

ウリヤの葬儀の後すべてを平常どおりにしようとした。パテシバを宮廷に招き自分の妻の一人にした。全てのことか平常に戻つたと思つた。今日クリスチャンの中にも罪を持つてゐる人がゐる。誰も知らないと思ひ込みやすい。あなた達の生涯の中のヒビは誰も知らない、しかし神

はあなた達のヒビを知つてゐる。(サムエルII十一・二七)主はダビデが何をしたか知つておられた。神はダビデを愛する故にダビデを完全なものとするために神の使いを遣わしたのである。

三、罪に対するいやし

詩篇五一

①罪を罪と認める。

ダビデは自分の行為を罪と認めた。わたしはちも罪を罪と自分の生活の中に認めるまでは実際ににおける神のいやしを發見することはできない。怒りの罪であるならばそれを怒りの罪と認めなければならぬ。不純なる思いは不純なる思いとして、言い訳をすることはできない。聖書ご自身が語る時私達自身もそれを罪と認めなければならぬ。

②神の恵みの必要を認める。

ダビデは霊的なきよめが神御自身から来ることを認めてゐる。救いは神の恵みによつてのみ来ることを認めてゐる。あなたの人生の中に「神様の救いを下さい」と祈るのである。神が必要としておられるのは悔いし砕かれた心なのである。

③神によるきよめを求めた。

「どうか私のとがを私から全く洗い去り」(二節)私を洗つて

ください。そうすれば、私は皆よりも白くなりましょう。(七節)「神よ。私にきよい心を造りゆるがない霊を、私のうちに新しくしてください」(十節)これこそがきよめられた人生の秘訣である。これこそがホリーネスの秘訣である。私たちの生涯を神のきよめの為に全く開いてしまふことである。そしてそれは私たちの危機経験であり、全ききよめとして私たちに与えられる。しかし、全ききよめられた後にもあるクリスチャンたちはヒビを自分の生活の中に体験することがある。しかし、神はその小さな霊的ヒビをも御存知である。それを指摘して下さるとき私達はまた神様からの霊的なきよめを戴かなくてはならない。ダビデが主のみ心になつた人物になつたことは彼の正直さの故である。神は、私たちの生涯にあるヒビを取り除くことのできる方である。自分の心、全身を神様に献げつくして神に従つて行くことができる。主イエス・キリストによつて私たちに与えられてゐるすばらしい救いの故に神に感謝する。

アーメン!

(文責 石田敏則)

■聖会第二夜

「大いなる救い」



クラレンス・ベンス博士

聖書 第一ヨハネ三章一―八節

私たちは、「このすばらしい救いをないがしろにしていないか（ヘブル二3）」と、質問が投げかけられている。しばしば、私たちは三つの方法を持って、この大いなる救いの価値を減少させ、安っぽいものとしてしまっている。

一、偉大な救いを、小さなものにしてしまっていないだろうか。私たちは、地獄での審きから逃れ、すでに天国にはいることになっているから救われていると言う。確かに地獄から、罪責感から、神の怒りから救われている。しかし、これらは義認の面からの答えに過ぎない。聖書はさらに大いなるものがあると告げている。義認は神の刑罰からの救いを意味し、聖潔は罪からの解放を意味する。神は、この二つの経験を私たちの生活と生涯の中に持つことを願っておられる。この大いなる救いこそ

が、ホーリネス運動の持つメッセージである。

第一ヨハネ三章を見てもよい。ここには、主の来臨の目的が示されている。5節には、「罪を取り除くため」とあり、8節には、「悪魔のしわざを打ちこわすため」とある。悪魔の用いる武器は、罪である。主は私たちの生活、生涯にある罪を打破するために来られた。もし「地獄行から救う」だけとするなら、この救いを小さなものとしてしまう。神は私たちを潔め、御名のために生きることが出来るように回復されるのである。これこそが、ウエスレーの言う全き救である。神のご計画は、私たちの過去の罪を許し、聖霊の力によって現在の罪に対し勝利を与え、全ての不義から潔めることである。ウエスレーは、この救いを次のように定義している。救いとは、神ご自身の全き働きで、私たちの魂の中に恵みの働きと

して始められる。それは天国の栄光の中にあつて完成されるのである。」

二、偉大な救いを、短いものにしてはいないだろうか。

救いは、神が私たちに語りかけて下さった時から、天国に於て完成されるまでを含む。転機としての回心、あるいは獣身は偉大な経験であるが、神の救いはさらに大きな、生涯的な事柄を意味する。エペソ二8―9に記されているように、クリスチャンは日々の歩みの中で、恵みのゆえに、毎日に救われ深め続けられるのである。救いとは、私たちの全生涯を通しての、神の偉大な救いを、一瞬間の転機を経験に限定して、短いものにしてはいないだろうか。

三、偉大な救いを、弱いものにしてはいないだろうか。

私たちは聖会において聖潔を求め、恵みの座に進み出る。しかし、その帰りに、またダメだろうと悲観的になる。聖書は、自分には不可能だが、神は救う力を持っておられると確信させる。私たちの中に良い働き

を始め下された方は、キリストの日が来るまでに完成させて下さる。これが私たちの確信である。ローマ八24には、どのよう

に私たちが救われたかが書いてある。信仰によって、そしてこの望によって救われたと記されている。罪から救って下さる神の力に、この望は置かれている。第一ヨハネ三3には、この望をいだく者はみな、キリストのごとく自らを清くするとある。それは、自分の中に働く神の力を確信することである。ピリピ二12―13からは、潔められることに落胆してはならないと教えられる。救いの達成は、働いて下さる神への信仰によるからである。第一ヨハネ一7は、御子の血潮が全ての不義から継続的に清め続けて下さることを語っている。

このようすばらしい救いを、ないがしろにしてはいないだろうか。罪人は救いを拒絶する。一方、クリスチャンは救いをないがしろにする危険は持っている。私たちは神が提供して下さった偉大な救いを、小さなものと

してしまつて、それで満足していることはないだろうか。

あるドイツの食しい労働者が、豊かなアメリカの事を聞き、移住を決意した。数カ月の間懸命に働いて、ようやく大西洋を横断する船の切符を手に入れることが出来た。彼は乗船すると、船底の自分の船室に閉じ込められた。何日も一歩も部屋から出ない彼を怪訝に思つた船長が訪ねてみると、持ち込んだ食料が腐り始め、悪臭が漂う中で困惑している彼を見つけたのである。彼は船長から、手にしている切符が、航海中のすばらしい食事も、デッキでの日光浴も、パーティーも、演奏会もすべてを約束しているとは知らされたのである。それとも知らず、暗い船室に彼は閉じ込められていたのである。私たちは船底にいるクリスチャンとなつていないだろうか。それならば今すぐ、そこから出て、救いの新しい経験の中にあることが出来るのである。

(文責 矢木良雄)

■第二回聖化大会報告



顧みて

伊藤昭吉

昨年の十月、聖化交友会による第二回聖化大会が行なわれたことに主の御名を崇めています。

私は、足りないながらも裏方に回って奉仕させていただいた者として、二つのことに強烈な印象を受けました。

その一つは、JHA会長の本田弘慈師をはじめとする役員の方々のホーリネス信仰の宣証にかけるなみなみならぬ熱情に触れさせていただいたことです。日本聖化交友会の結成自体、日本の教会史の流れの中で待望され、時が熟すが如くして生み出されたものであることを思う時、折りと幻をもって立ち上がられた先生方の信仰に、深い感動を覚えたことでした。

二つ目は、出席者の中に、ある種の霊的なうねりのようなものを感じとらせていただいたことです。それは、出席された方々の姿勢の中にも見られました。「集会に出席して恵まれない」という受け身の一面ばかりではなくこの大会に出席することによって、自らのうちになされているホーリネスを「宣証する」という積

極的な信仰告白の場として出席されていたように見受けられたからです。

「ホーリネス」が、きよめ派といわれる教会、教団でそれぞれに語られ体験されて今日に至っていることですが、このすばらしい恵みの教えを日本の教会全体の中でどのように位置づけ、告白し、宣証していくかという点においてはまだまだ未耕地の広がりがあるように思われます。例えば、個人的な体験としてのホーリネスが聖書的に、神学的に整理されてホーリネス陣営以外の兄弟たちと独語ではなく対話して行く必要を覚えます。

また、教会形成が盛んに叫ばれている今日ですが、ホーリネスと教論との関連で確立されなければならぬ分野が残されているようにも思えます。

さらに、ホーリネスが個人的なパイエテズムの領域にとどまらないで、実践的ホーリネスとして倫理的にも整理され、この世との接点のなかで世の光として積極的にインパクトを与えて行かねばならないという課題があります。

世界は情報化時代を迎え、ますますグローバル化してゆきます。そうした中で好むと好まざるにかかわらず教会は「超教理派」的にならざるを得ず、世からの期待に応える責任が生じてきます。そうであればあ

るほどホーリネス人としての信仰のアイデンティティが問われているのが現状であるといえます。

こうした「現代」という渦の中で持たれた聖化大会はまことに時宜をえたものであったといえます。出席された兄弟はそのような背景のなかで、ホーリネスを告白できるという喜びを出席することによって表現しておられたように見受けました。

プログラムの構成において、多少自画自讃を許していただければ、神学的、実践的、そして霊的にと配分よく組まれており、それぞれのニードに答えることができたのではないかと思います。神学生の交歓会とそれに続く合同コワイヤーは、ホーリネス陣営の未来を展望させるに十分な迫力があり御名を讃美致しました。

今年最初のころみであった神学校教師陣の交歓会は講師のクラレンス・ベンス師によってアメリカの神学校教育の現状を聞くという「テーマ」でもたれ、実に有意義な時を持つことができたが、このような会合はこれからも続けて欲しいという声がありました。

ともあれ第二回聖化大会は終わりました。JHAの働きがますます神の期待に応え、世と教会に仕えるものでありたいものです。

総務委員会より

◆去る、第二回聖化大会に講師として来られた、クラレンス・ベンス博士から、日本聖化交友会に対する感謝とともに、大きな期待を寄せておられるとの礼状が届いております。内容的にも充実した大会であったことを、顧みて感謝いたしております。今回は紙面の都合上、第二回聖化大会の講演内容の全てを掲載することは出来ないことが残念ですが、いずれよい機会に文書化したいと願っております。

◆本年も、第三回聖化大会の日程と講師が決まりましたので、今より予定に組入れて、お備えいただければ幸いです。

◎東京日程◎十月二十四日(月)二十五日(火)の二日間。◎会場◎淀橋教会。◎講師◎デビッド・トンソン博士(アズベリー神学校教授) 博士は、現在、多くの文書活動とともに、聖会及びレクチュアアの講師としても活躍され、期待されている器であります。

◆来たる四月十九日、二十一日の日程でポートランド市において、アメリカの聖化連盟(CHHA)の第百二十回大会が開かれるため、日本聖化交友会としてもこれに参加する予定です。